

[12]

氏名	彭強 ^{ほう きょう}
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	東アジア文化博第 35 号
学位授与の日付	2018 年 9 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	《拜客訓示》研究 －16-17 世紀在華耶穌會士的文化指南－
論文審査委員	主査教授 内田 慶市 副査教授 奥村 佳代子 副査教授 中谷 伸生

論文内容の要旨

本論文は近年発見された『拜客訓示』と呼ばれる 16- 17 世紀の在華イエズス会宣教師（おそらくはマテオ・リッチ）の手になるとと思われるマニュスクリプトに関わる研究であるが、その成立年代、著者、内容等について、その東西言語文化接触、文化交渉学の視点から総合的に論じたものであり、構成は以下の通りである。

緒章

第一章「管堂」與「買辦」－早期耶穌會的内與外

第一節 〈管堂中事〉的祭服及其意義

第二節 〈管堂中事〉中的祭儀及「教中的規矩」之建立

第三節 〈買辦的事〉呈現的中國物產狀況

第四節 《拜客訓示》與早期在華耶穌會的經濟生活

小結

第二章「淨」與「等」－會院中的日常文化

第一節 《拜客訓示》中的「淨」文化

第二節 《拜客訓示》中的「等」

第三節 中西合璧之「家裡的規矩」

小結

第三章「拜帖」的故事－會士與士大夫的交往禮儀

第一節 「拜帖」文化的由來

第二節 《拜客訓示》中的拜帖禮儀－原則、書寫及其評述

第三節 《拜客訓示》中的拜見－過程、實境及其社會影響

小結

第四章《拜客訓示》中的耶穌會士行跡考

- 第一節 「會士列表」與早期在華耶穌會士概況
- 第二節 杭州的耶穌會士—考證〈買辦的事
- 第三節 北京的耶穌會士—考證〈拜客問答
- 第四節 關於《拜客訓示》作者的設想
- 小結
- 第五章〈拜客問答〉—「西國」呈現給中國的早期面孔
 - 第一節 《拜客訓示》中的「西國」
 - 第二節 早期在華耶穌會士的文化認同研究
 - 第三節 早期在華耶穌會面臨的文化衝突
 - 第四節 《拜客訓示》與 16、17 世紀東西方的文化碰撞
 - 小結
- 第六章 日常生活與制度文明—早期在華耶穌會的運作
 - 第一節 耶穌會東亞系統及其內在矛盾
 - 第二節 早期在華耶穌會傳教的文化路徑及其意義
 - 第三節 從《拜客訓示》研究早期在華耶穌會的運作機製
 - 小結
- 第七章、問答——早期耶穌會士的傳教敘事
 - 第一節 早期在華耶穌會士的傳教故事及陳述方式
 - 第二節 《拜客訓示》的互文性研究
 - 第三節 再論《拜客訓示》的寫作目的及其性質
 - 小結
- 終章

このように本論は全部で七章から成るが、まず緒章で『拜客訓示』の研究背景、版本の整理、そして『拜客訓示』の各部分の大まかな内容と先行研究の問題点を指摘した後に、16世紀から17世紀のイエズス会宣教師がとらえた東と西の文化の特徴、それらの接触と影響等々について各章で詳述し、「文化指南」としての『拜客訓示』の本質を明らかにしている。

まず、第一章では『拜客訓示』の「管堂中事」と「買辦的事」という2つの篇に対して早期イエズス会の「内」と「外」というユニークな切り口で論を進めている。特に、前者における東西の「祭服」の「色」に関わる論述はまさに当時の東西の色彩観の違いを明確に示したものである。「買辦的事」では当時の中国の物産状況を具体的に示した資料として価値あるものとして指摘し、それが実はマテオ・リッチの叙述と軌を一にしていることも論じている。

第二章では、『拜客訓示』を「浄」と「等」といった観点から取り上げている。つまり、『拜客訓示』を通して宣教師の日常生活、文化を取り上げようとしたもので、その特徴を「浄」と「等」とコンパクトな形でまとめている。洗礼、食事、祭服等々から「浄」を、また教会内での「呼称」の実態や生活実態の中から、宣教師の間における「等級」文化を指摘した。

第三章は「拜帖」を通して宣教師と中国の士大夫との交際儀礼を取り上げ、中国伝統の

「拜帖」の儀礼が宣教師に如何に受容されたかについて詳しく論じている。

第四章は『拝客訓示』に付された「會士列表」の分析を通してイエズス会宣教師の来華の足跡を述べている。それはまた『拝客訓示』の成立年代の推定とも深く関わっていることも指摘されている。

第五章は、『拝客訓示』の中で最も重要な「拝客問答」の篇に関する論考であり、それに示された「西國」すなわち「ヨーロッパ」に関する記載や当時の東西の文化交流の具体的な内容とその内包について詳しく論じている。16-17世紀の東西の文化衝突の実際を的確にまとめている。

第六章は『拝客訓示』全体の構造に関する論述で、第七章では『拝客訓示』の前後の継承関係を述べている。

終章では、本論文の結論として大きく4つの点について述べている。1つは『拝客訓示』がイエズス会の布教実践と関わる文化的記録であり、明末東西文化の具現化されたものであること。2つめは、『拝客訓示』は、それは東西文化交流の一つの「証」であり、深い文化的価値を有し、確かに宗教を主な内容とはしているが、実は宗教を超えた価値を持つこと。3つめは、それは現代の東西文化交流の起点であったこと。そして4つめには、それはまさに「跨文化」研究の典型的なテキストであったということである。

論文審査結果の要旨

本論文は上記のように16世紀から17世紀に成立したと思われるイエズス会宣教師の資料『拝客訓示』を全面的に詳細に読みほどこき、各篇ごとの内容を詳しく論じ、それらを通して、当時の西洋人の中国観と中国人の世界観、東西の儀礼の相違、東西の物産の交流等々、東西文化交流の実態を文化交渉学の観点から明らかにしようとした意欲的な論考である。

緒章の先行研究に関する記述を見れば分かるように、はこれまでのこの分野の研究にほぼ目を通しており、そこにおける成果と問題点も鋭く指摘している。まさに、それまでの研究に甘んじず、新しい視座を提出しようとした筆者の強い意欲を表したものと言える。

本論はすでに述べたように、全七章から成るが、大きく見れば二つの部分から構成されている。一つはいわゆる『拝客訓示』のテキスト分析とそれを通してのそれに内包される文化属性とその意義の解明、もう一つは『拝客訓示』の中の最も重要な部分である「拝客問答」に対する総合的な研究である。

前者の部分では、イエズス会の「内」と「外」、あるいは「浄」と「等」といった極めてユニークな切り口で論を進め、『拝客訓示』の特徴を示すのに成功している。また、東西の色の捉え方の違い、日常文化の相違、東西の儀礼の差異などが詳しく論じられ、『拝客訓示』の内容が明らかにされている。本書の成立や作者については、未だ明確にはされていないが、本論文では、付録の「會士列表」などからその年代を推定し、作者についても、中国の『五雜俎』などとの比較から特定しているが、恐らくこれが定説になるものと思われる。

後者の部分では、特に、ヨーロッパと中国の物産、地理情報、政治制度等々が極めて詳細に指摘されており、本書がまさに「欧州指南」的性格を帯びたものであることが明らか

にされている。

総じて、本論文は、これまでの『拝客訓示』研究には見られなかった新しい知見が多く示されており、『拝客訓示』研究を大きく前進させる優れた論考とすることができる。ただ、本論文では、たとえば、その「文体」を始めとした言語的特質の問題、あるいは、当時のイエズス会宣教師アレニの『職方外紀』『西法答問』との継承、影響関係について深く論じられていないのが残念な点であるが、これに関しては今後引き続きの研鑽を期待するものである。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。